

狐〈きつね〉の恩返〈おんがえ〉し（二）（多紀町）

多紀町の篠見〈ささみ〉という所に、ひとりの産科の医者がおりました。

ある秋の夜中のことです。はげしく戸をたたくものがあるので出てみると、

「泉の者ですが、妻が難産〈なんざん〉で苦しんでいますから、来てください。」

というので、医者はさっそく用意をして、その人について行って、手当てをしてやりました。

四、五日したある日のことでした。また、さきの男が尋〈たず〉ねてきて、

「子どもは死にましたが、妻が助かったのは先生のおかげです。」

と言って、ぼた餅〈もち〉の一ぱいつまった重箱とお金包〈つつ〉みを置いていきました。

あとで金包〈つつ〉みを開いてみると、お金ではなくて木の葉でした。どうもあれは人間らしくないので、どうせこのぼた餅も、馬の糞〈ふん〉か何かであろうとっていました。

しかし、いつまで立っても変わりません。これはほんとうのぼた餅でした。

あとで聞けば、篠見から西の方へ嫁入〈よめい〉りした人が、里帰りの土産〈みやげ〉にぼた餅をもらって帰る途中、狐に重箱ごととられたというので、さてはこのぼた餅がそれにちがいないと、畜生〈ちくしょう〉ながら狐〈きつね〉が恩を忘れぬ義理がたいことに感心したという話です。

